

「願成就文」考

金子寛哉

一 願文と願成就文

ここでいう「願成就文」とは、浄土三部經の一つである『仏説無量壽經』卷上に説かれる四十八願文に対して、同經の下巻を中心にそれら四十八の本願の一つ一つが、法蔵菩薩の修行によつて完成、成就されたことを示す文、という意味である。

このことは今日では一般に常識化され、『無量壽經』諸本の対照研究等でも当然のこととして用いられている。今この「願成就文」に対する解説を見ると次のように述べられている。恵谷隆戒編『浄土宗辞典』では、

願成就文、第十八願の成就せることを説いた文。すなわち大經下に「諸有る衆生、其の名号を聞きて、信心歡喜して乃至一念至心に廻向して、彼の国に生ぜんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯だ五逆と正法を誹謗するをを除く」という文を指す。この文は法蔵因位の誓願たる念仏往生の願が説かれたものと

解せられる⁽¹⁾。

とされ、第十八願とその成就文を中心に述べられている。又『仏教大辞彙』では第十一願、第十七願の願文とその成就文を対照して述べている⁽²⁾。このような考え方を中心に、四十八願の全てに相当する願成就文を対照して示したのは、南条文雄博士の著『支那五訳対照梵文和訳仏説無量壽經』中の「仏説無量壽經、仏説阿弥陀經梵文和訳序」⁽³⁾の説である。

氏の序文中の記事によると、この願文と成就文との対照は義祖、孝徳母院良雄贈嗣講手写『本願成就対』

によるとされ、更にこの良雄師によつて手写された『本願成就対』の奥書には、

右写本一卷、堅田山慈敬寺宝庫中得之、御執筆末^レ知^二何人^一、恐存覚尊老御筆跡歟

と記されていた旨紹介されている。この奥書中に見られる「慈敬寺」及び「存覚尊老」等については、筆者は未だ確認していないが、かなり早い時期の人であつたのではないかと

推測される。

南条博士の対配の底本が梵文和訳の經文を中心とし、それを更に魏の康僧鎧訳に置き換えて表記しているので、多少不分明な所もあるが、とも角、魏訳の『無量寿經』の四十八願を中心に見ると、四十八願全ての願成就文が対配されていることになる。

一方、浄土宗第三祖良忠門下の了慧の著『無量寿經抄』においても、經文に注釈を施しながら、一々願成就文を指摘している。今それを略示すると次のようになる。

(イ) 願成就文のある願

- 1、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15(2)、
17(2)、18、19、21(2)、23、24、25(2)、27、28、29、30、
32(2)、33、39、41、46
(ロ) 願成就文のない願
2、16、20、22、26、31、34、35、36、37、38、40、42、43、
44、45、47、48(4)

これによると、了慧は四十八願中三十願(イ)について願成就文を示したことになる、残りの十八願(ロ)については指示されていない。

更に、近年の研究書として香川孝雄教授の『無量寿經諸本対照研究』においても願成就文について触れている。『同書』中に掲載する「諸本構文対照表」⁽⁵⁾において願成就文のある願

として指摘されているのは、魏訳の『無量寿經』を中心に見た場合、二十九願のみである⁽⁶⁾。

以上述べて来たように、願文と、それに対応する成就文があると見る見方に対して、少し異なった視点から批判している説も見られる。

藤田宏達博士の『原始浄土思想の研究』によると、『大阿弥陀經』と『平等覺經』の本願説を比較検討され、

『平等覺經』は言々々々において『大阿弥陀經』の文を踏襲したことが明白であるが、ただ本願文の部分は相当異なっている。

その主な相違点は、『平等覺經』は『大阿弥陀經』の第二、三、六、十二、十八、二十三願の六つの願を欠く代わりに、新しく住般泥洹、莫有惡心、一生等の三つの願を加え、さらに『大阿弥陀經』の第十五願を二つの願に、また第十七願を三つの願に別立して、全体としての統一をとった点にある。だから、『平等覺經』が『大阿弥陀經』の願文を修正整備したことは明らかである。もっとも、『平等覺經』が削除した『大阿弥陀經』の六つの願は、『大阿弥陀經』ではいずれもその成就文があり、それは『平等覺經』にもそのまま受けつがれている。他方『平等覺經』が新たに加えた三つの願の成就文は、『大阿弥陀經』はもとより『平等覺經』にも存在しない。したがって願文をその成就文との関係において見れば、『大阿弥陀經』のほうが經全体として調和しているのに対して、『平等覺經』のほうが、かえって願文と成就文との不整合がめだってきている。これは『平等覺經』の修正・整備が

単に願文についてのみ行なわれた事実を示すともに、本願文としては、『大阿弥陀經』のほうが古形を保っている事実をあらわしているといつてよい。⁽⁷⁾

と述べられている。いささか引用が長文になったきらいはあるが、兩經の比較検討の論旨の運びと、その論旨の運びの基本になっているのが、願文と成就文の相互關係に置かれているという事を正確に把握していただきたい為である。

更に『同書』では国土に関する願について論じ、

この願に当るものは、わずかに国土七宝、寶具自然の一願を数えるのみである。しかも、この願は『大阿弥陀經』のみに説かれるもので、『平等覺經』には説かれず、また四十八願系にも説かれていない。慧遠が「摂淨土願」にあげているのは『無量壽經』の第三十一願（国土清淨願）と第三十二願（国土嚴飾願）であつて、それとも直接の連絡を持たないものである。したがつて、本願文においては、国土に関する願は、はじめから一定したものではなかったことが知られる。ところが、（無量壽經）の諸本においては、本願文が終わつた後の部分においては、国土すなわち極樂淨土の器世間に関する描写が詳しく説かれている。後の宗義学的解釈によると、その描写はほとんどすべて本願文と対応關係にあると見なされているが、しかし、事実はそのように完全に対応しているわけではない。⁽⁸⁾

と述べられている。無量壽經諸本の形成過程についての氏の所説は妥当な見解かと思われる。ただここで注目したいのは

今の氏の所説中に見られる、「後の宗義学的解釈によると」無量壽經に説かれている器世間に関する「描写のほとんどすべて本願文と対応關係にあると見なされているが、しかし、事實はそのように完全に対応しているわけではない」という点についてである。確かに四十八願に全て成就文があるとする見方は、現代の諸本比較による思想的な展開過程を見て行こうとする立場からすれば、多少無理があるかも知れない。しかし、その願文と成就文の全てにわたる対応の仕方が妥当であるかどうかは別として、今まで見て来た藤田説に於ても、一連の『無量壽經』諸本における所説の中に、願文に対応する願成就文の存在することを認め、しかもそのことを前提に論を進めていることは否定出来ない。

それではこのように同一經典中に願文と成就文が存在することに着眼されたのは一体何時頃の誰であつたのだろうか。

二 願成就への注目

(1) 曇鸞、道綽、善導の本願とその成就

阿弥陀仏の極樂淨土を本願成就の世界とする見方は、早く中国の曇鸞の所説中に見得る。即ち彼の著『往生論註』巻上によると、

此、已下是第四觀察門、此門中分為三別、一者觀察器世間莊嚴成就、二者觀察衆生世間莊嚴成就

と述べ、この中の一の器世間莊嚴を更に「莊嚴清淨功德成就」、「莊嚴量功德成就」等の十七種の莊嚴功德が成就された世界として觀察の對境としている。

この十七種中の第三莊嚴性功德成就の所では次のように解説されている。

亦言性者是聖種性。序法藏菩薩於世自在王仏。悟無生法忍。爾時位名聖種性。於是性中發四十八大願。修起此土。即日安樂淨土。⁽¹⁰⁾

と述べ、極樂淨土が法藏菩薩の本願成就の世界であることを明らかに示している。

更に『同書』下卷「不虛作住持功德成就」では、

不虛作住持功德成就者、蓋是阿彌陀如來本願力也。中略。所不虛作住持者。依本法藏菩薩四十八願、今日阿彌陀如來自在神力。願以成力。力以就願。願不徒然。力不虛設。力願相符。畢竟不差。故曰成就。⁽¹¹⁾

と述べ、更に「仏莊嚴功德成就」八種と、「菩薩莊嚴功德成就」及び前述した器世間莊嚴の所謂三種二十九句莊嚴成就のまとめの所で、

又向說觀莊嚴仏土功德成就莊嚴仏功德成就莊嚴菩薩功德成就、此三種成就願心。莊嚴應知。應知者。應知此三種莊嚴成就由三本四十八願等清淨願心之所莊嚴。因淨故果淨。非無。因他因有也。⁽¹²⁾

「願成就文」考（金子）

等と言ひ、極樂淨土の三種の莊嚴相は全て阿彌陀仏の四十八願成就によつて成り立つものであるとしているのである。

また道綽の『安樂集』には次のような文が見られる。

然彼淨土乃是阿彌陀如來清淨本願無生之生。⁽¹³⁾

といい、この他にも一二見られるが、それらは皆曇鸞の説を承けたもので、阿彌陀仏の淨土が本願の成就によつて莊嚴されたものであるとする点では同じである。

同じく善導の『觀經疏』玄義分にも

無量壽經云、法藏比丘在世饒王仏所行二菩薩道。一願言、若我得仏。仏十方衆生稱我名号。願生我國。下至三念。若不生者。不取正覺。今既成仏、即是酬因之身。⁽¹⁴⁾

といい、同著『往生禮讚』には

觀二彼阿彌陀極樂界、广大寬平。衆宝成四十八願莊嚴起、超諸仏刹。最為精妙。⁽¹⁵⁾

等の文が見られ、阿彌陀仏の依正二報が皆本願の成就によることを示している。しかし、これらの道綽、善導の説は皆曇鸞の説の繼承と見られ、阿彌陀仏の淨土の依正二報が本願の成就に依るものであるとする点では共通している。しかし、『無量壽經』の一一の本願に対応する願成就文が同一『無量壽經』内にあるとする説は見られない。このような願成就文があるとすると説は淨影寺慧遠の『無量壽經義疏』及び嘉祥寺吉藏の『無量壽義疏』にも勿論見られない。迦才の『淨土

論』には願成就文相当部分に注目するが異なった意味での引用である。

日本の祖師の著作中でも良源の『極楽浄土九品往生義』、源信の『往生要集』、珍海の『決定往生集』、『菩提心集』等には筆者の見た限りでは全て「願成就文」という用語は見られなかった。永観の『往生拾因』には願成就の意は見られるが、願成就文の指摘はない。

(2) 法然の願成就文

法然の『三部経大意』によると、第十八願第十九願の「願成就文」が指摘され、『無量寿経釈』には第一、第二十一の願成就文を示したあと、

如^レ是初自^ニ無三惡趣願^一、終至^ニ得三法忍願^一、一一誓願皆以成就^{シテ}、とし、しかるのちに第十八願成就文を提示して述べている。⁽¹⁶⁾

『選択集』ではこれを更に整えているように見られる。⁽¹⁷⁾

それらの詳細については他の機会に述べることとし、以上見て来たように、『無量寿経』中に願文と願成就文が説かれていることを初めて明確に指摘したのは法然だったのではないかということである。若しもこのような見方が妥当なものとすれば、前述した藤田氏の無量寿経諸本の比較研究も法然の説をもとに遡及的に検討を進めたものと見ることも可能である。

1 『浄土宗辞典』一〇八頁。

2 『仏教大辞典』第二卷九五頁b c。

3 『支那五訳対照梵文和訳仏説無量寿経』六〇十頁参照。

4 永仁二（一二九四）年作。テキストは『浄全』十四卷所収『無量寿経鈔』による。尚、願成就文の示されていない願は十八あるが、筆者の見落しがあるかもしれないので更に検討が必要である。

5 昭和五九年二月十日、永田文昌堂刊。『同書』四〇〇四一頁参照。

6 他に『大阿弥陀経』『平等覚経』では「女人往生願」、「S」

「T」では「華雨楽雲」の願成就文が指摘されている。

7 藤田宏達著『原始浄土思想の研究』三八九頁参照。尚、引文中の註13 14には『正藏』のテキストによりそれぞれ相当文が指示されている。

8 『同書』四〇〇頁。又、引用文中の註2には前述した南條博士の説をあげ、「サンスクリット本願文の二つについて、その成就文の箇所を指摘しておられる。これは従来の宗義学的解釈にもとづいた無理な結びつけであって、実際には本願文のすべてにわたる成就文は存在しないとしている。

9 『浄全』一、一二二頁下。

10 『浄全』一、一二三頁下。

11 『浄全』一、二四七頁下。

12 『浄全』一、二五〇頁上。

13 『浄全』一、六八九頁。

14 『浄全』二、一〇頁下。

15 『浄全』四、三七〇頁下。

16 『昭法全』七三頁。

17 『昭法全』三二〇〜三二二頁。